



## 令和4年度国際消防防災フォーラム (シンガポール)の開催

消防庁国民保護・防災部 国際協力官 遠藤 崇

### ●国際消防防災フォーラム(International Forum on Fire and Disaster Management)

経済発展や都市化が進展しているアジア諸国では、これまで以上に高度な消防防災体制を構築する必要が高まっており、これらの国から我が国に対し、人命救助や消火技術、火災予防制度等に関する知見の共有や技術の移転を求める声が届いている。

このことを踏まえ、消防庁では我が国の消防防災技術・制度等を、アジア諸国を中心に広く紹介する国際消防防災フォーラム(以下「フォーラム」)を平成19年度から開催しており、これまでに、ベトナム、トルコ、タイ、インドネシア、モンゴル、ミャンマー、カンボジア、マレーシア、フィリピンの9カ国で実施してきた。

また、フォーラムには開催地の消防防災関係者が多数集うことから、我が国の消防防災インフラシステムの海外展開を推進する場としても活用すべく、平成25年度からは日本企業による消防防災関連製品の紹介・展示も実施している。

新型コロナウイルス感染症拡大に伴うパンデミックの影響を受け、令和3年度は、オンラインで開催したフォーラムだが、国交往来やイベント開催に関する各種制限が徐々に緩和されていくのを確認し、令和4年度はかねてより構想していた「マルチ形式」での開催に踏み切った。これは、複数のASEAN諸国の消防防災関係者の参加を得て、特定の国を対象とせず、幅広く、我が国の消防防災制度や製品を周知することを目指すものであり、開催地は、大型の国際会議を實

施できる会場が多く存在し、ASEAN諸国からのアクセスもよいシンガポールとした。

本稿では、この初めての試みであったマルチ形式の令和4年度国際消防防災フォーラムの様子をお伝えする。



令和3年度はオンライン開催、約60カ国より1,200名以上が参加登録

### ●参加者

ASEAN諸国の消防防災関係機関に対し、消防庁が関係を構築している組織については直接、

そうでない組織については駐日大使館等を通じて、フォーラムへの参加を呼びかけたところ、次





地域防災における消防団の重要性を訴える消防庁地域防災室職員



プレゼンテーションの内容について質問するマレーシアの参加者

は？」など、様々な質問が投げかけられ、災害対応におけるボランティアの重要性を参加者間で共有する貴重な時間となった。

## (2)我が国の消防防災関係企業の製品説明

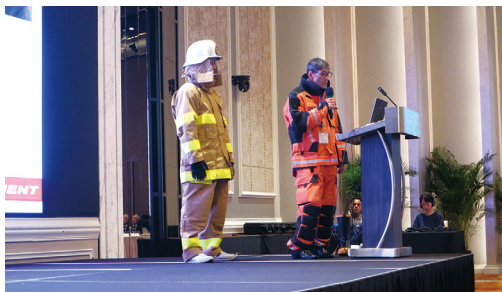
今次のフォーラムでは、以下の10企業等が会場内に設置されたブースにて製品説明を参加者に行うとともに、1社20分ほどのプレゼンテーションも行われた。

株式会社赤尾、オリロー株式会社、一般財団法人海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)、株式会社シバウラ防災製作所、トーハツ株式会社、能美防災株式会社、株式会社初田製作所、船山株式会社、ホーチキ株式会社、ヨネ株式会社 (※50音順)

我が国の企業が、海外市場で十分な成果を出すにあたって、市場での認知度は重要な課題の一つである。フォーラムには、特定の国との共催で行うバイ形式であっても、その地の消防防災関係者が多数集まることから、その場で製品紹介することの意義は大きい。そして、今次は、複数の国の消防防災関係者が一堂に集い、その中には消防機関の次長などハイレベルクラスも

含まれていたことから、認知度向上への効果はより大きなものになったのではないと思われる。もちろん、この場で商談成立とはいかないが、今次のフォーラムは複数の消防防災担当省庁や公的機関との関係を構築する足がかりになるものであり、この機会を一つのステップにして、更なる海外展開を図ってもらえればありがたく、その後のサポートが必要な場合には、消防庁では積極的にこれに応じていきたいと考えている。

参加企業等から、フォーラム終了後にコメントを得たが、「今まで、接触がなかった国の消防防災関係者と接点を持つことができた」、「消防庁からの日本の消防組織(消防署、消防団、自主防災)に関するプレゼンは、各国の参加者が興味深く聞いていた。このような組織がASEAN諸国で確立されてゆくことにより国内の防災用品の海外輸出が伸びるので次回も是非紹介していただきたい」、「プレゼンテーションを傾聴するという観点では、15日間という期間設定はよいが、ASEAN出席者とのコミュニケーションをとる時間が限定的であったので、2日間の開催



防火服の自社製品をステージ上で参加者にPR中



企業の製品説明に耳を傾ける参加者



会場内のブース上でカンボジア等の参加者とコミュニケーション



ユーザーフレンドリーな製品デザインに関心を寄せるタイの参加者

がよかった」といった声があった。フォーラムは、我が国の消防防災インフラシステムの海外展開を推進する場でもあるので、これらの意見は次回以降のフォーラムに反映させていくようにしたい。

### (3)ASEAN参加国の消防防災に関する取り組み等

消防防災という同じ土俵の上に、様々な国が集まる貴重な機会なので、ASEANの参加国からも、自国における重点的な施策、あるいは、直面している課題について、プレゼンテーションを行ってもらった。参加国の政策立案にも参考になるであろうし、我が国にとっても、公的機関は今後の協力関係を見いだす、また、企業にとっては自社製品の活躍の場を探す機会になるのではないかと期待された本セッションでは、シンガポールとマレーシアがプレゼンテーションを行った。

シンガポールからは、重点的な取り組みの一つとしてのテクノロジーの活用について、様々な施策の紹介があった。特に、興味深かったのは、

- 消防隊員のトレーニングでコンピューターを活用して、個々の体力、筋力を可視化

- スマートフォンの動画を活用した通報システム
- 市街地における化学薬剤の漏れを監視カメラでモニタリング

といったものがあった。

マレーシアからは、自国の災害対応に関する省庁の役割分担について説明があった後、現在の課題として、省庁間や関係機関間の連携能力の向上が挙げられた。大規模災害時の関係機関の連携の難しさは、我が国同様、他国においても生じていることが共有された。

### (4)我が国の消防防災に関する国際協力案件

#### ①JICA

今回のフォーラムは、JICA本部から職員を派遣していただき、JICAの国際協力案件が成立する流れやこれまでにJICAが主導してきた消防に関する国際協力案件を説明してもらった。相手国のニーズを注意深く確認して行われてきた各案件について、ASEAN参加国からの関心は高く、フォーラム終了後も、技術研修の案件成立に向けた相談が持ちかけられるなど、日頃接する機会が少ないJICA職員と会話する機会を



Singapore Civil Defence Force次長からのプレゼンテーション



Fire and Rescue Department of Malaysia次長からのプレゼンテーション



消防分野の研修における良好事例を参加者に共有するJICA職員



海外での研修成果は自国で具体的な形にしてこそ意味があると訴えるEmbang元長官

ASEANの消防防災関係者に提供することができた。

## ②日本での研修の活用事例

フィリピン消防局(Bureau of Fire Protection)のEmbang元長官は、1990年代に我が国における救助研修に参加しており、その時の経験を基に、フィリピン国内にCBRNE災害対応部隊を創

設し、長年にわたり、部隊の発展に寄与している。プレゼンテーションでは、自身が関わった具体的な事例に触れつつ、“interpreting”という言葉 키워ドにしなが、他国の研修で得た知識、技術を自国の状況等に融合させながら、活用していくことの重要性が訴えられた。

## ●総括

1日半にわたって行われた今次のフォーラムの様子を概観してきた。バイ形式では盛り込まない内容もあり、参加者の満足度も高いように感じた今次のフォーラムを総括すると、以下の4点に集約されるであろう。

- ①フォーラムの元々の趣旨である我が国の知見、経験の共有と企業の海外展開支援の両立をマルチ形式において実現
- ②フォーラムを一度も行っていない、あるいは、久しく行っていない国とも、ネットワークを構築、再構築
- ③オープニングスピーチを石川駐シンガポール

日本国特命全権大使が行うとともに、JICA、CLAIRの参加もあり、本フォーラムが「オールジャパン」でコミットメントされている印象を醸成

- ④ASEAN参加国は、我が国との間のみならず、ASEANの他国と交流する機会を持たたことも、評価していた模様

フォーラムは、国際協力分野及び海外展開分野における消防庁の主要施策の一つであることから、今次の開催に関する各種のフィードバックや振り返りも踏まえつつ、引き続き、より良い実施内容を追求していきたい。



オープニングセレモニー後は、参加国ごとに石川大使、鈴木消防研究センター所長と記念撮影(写真はラオスの参加者とのもの)



機会を捉えて他国の参加者と交流するベトナムの参加者